ニセコ雪崩研究所　新谷暁生

～ニセコをめぐる昔と今～

ロッジ・ウッドペッカーズのオーナーを務める傍ら、ニセコ雪崩調査所の所長として「ニセコなだれ情報」を発信している新谷暁生さん。1970年代にニセコに移住して以来、約50年にわたる新谷さんとニセコの関わりを通して、ニセコについて考える。

● 新谷さんと「ニセコ」

新谷さんは、登山家として世界中の山々に挑んでいた。1972年に冬季札幌オリンピックが開催された際、たまたま日本に滞在していた新谷さんは記録のお手伝いをすることになって、そこでアルペン競技に出会った。「それまでも山を滑ってはいたけど「これはすごいな」と思ってアルペン競技に関心を持った」と新谷さんは語る。当時はアルバイトで生計を立てており、お金を稼いでは山に行くという生活をしていたそうで「ヒマラヤに行きたいとか思ってたけど、そんなことをしても生きてはいけない。まずは生業を作らなきゃだめだと。それでペンションをやろうと思ってニセコに土地を買った」と移住に至る経緯を話した。「観光に関わるっていう意識は全くなくて、学生さんの合宿所として作った。**スキーを頑張ってる子供らの世話する**のは俺に向いてる

「滑るやつの世話をするのが俺の仕事」

かなと思って始めた」と当時の想いを語った。

新谷さんがペンションを立てた数年後にはペンションブームが到来し、図らずもブームの先駆けのような形になった。しかし、当時に建てられたペンションは過去15年ほどでほとんど廃業してしまった。「ペンションをすることが目的じゃなくて、**スキーヤーの力になるために作った**。だから今も続けられてる」と話した。「当時ペンションやってた人たちはみんな都会に移り住んでいった。**何のためにこんなことやって俺の商売の邪魔しやがって**とも思ったけど、うちはうちで」と笑いながら語った。

● ニセコルールの作成

1980年代以降のニセコでは、場外滑走（バックカントリースキー）が頻繁に行われ、雪崩による死亡事故が多発していた。この状況を打破するべく、地元住民を始め多くの関係者が協議を重ね、2001年に『ニセコルール』が設定された（詳細はコラム：ニセコルールとは）。

新谷さんはニセコルールを作成した当時について「今から40年くらい前、毎年のようにコース外で雪崩事故が起きていて、事故の度に現場の捜索をしていた」と話した。当時はニセコでも、他のスキー場と同様コース外の滑走は禁止されていたが、それでも場外に出る人が後を絶たなかった。「新しく雪が降ると、最初は不安定だけど日が出て時間が経てば安定して崩れなくなる。でもニセコは安定する前にリフトが動いてしまう。リフトが動いて**いい雪降ったらみんな行くでしょ？**」と新谷さんは事故が起こるメカニズムを分析する。

「ほとんどの事故は吹雪の時に起きていた。だから、吹雪の時には場外に行かせないようにすれば事故は起きないはずだ。それをどうやって伝えるかを考えた結果、**ゲートから場外に出てもらうことにした**。場外を一律禁止にするのではなく、**安全な時にゲ**

コラム：ニセコルールとは

『ニセコルール』とは、スキー場外の事故防止のために設けられている独自のルールで、

- ◆ スキー場外へは必ずゲートを通って出ること
- ◆ 安全のためにヘルメットや雪崩ビーコンを装着すること
- ◆ 立入禁止区域には入らないこと。

などの項目が定められている

スキー場外滑走を認めている日本初の公式ルールであり、世界からも注目されている。

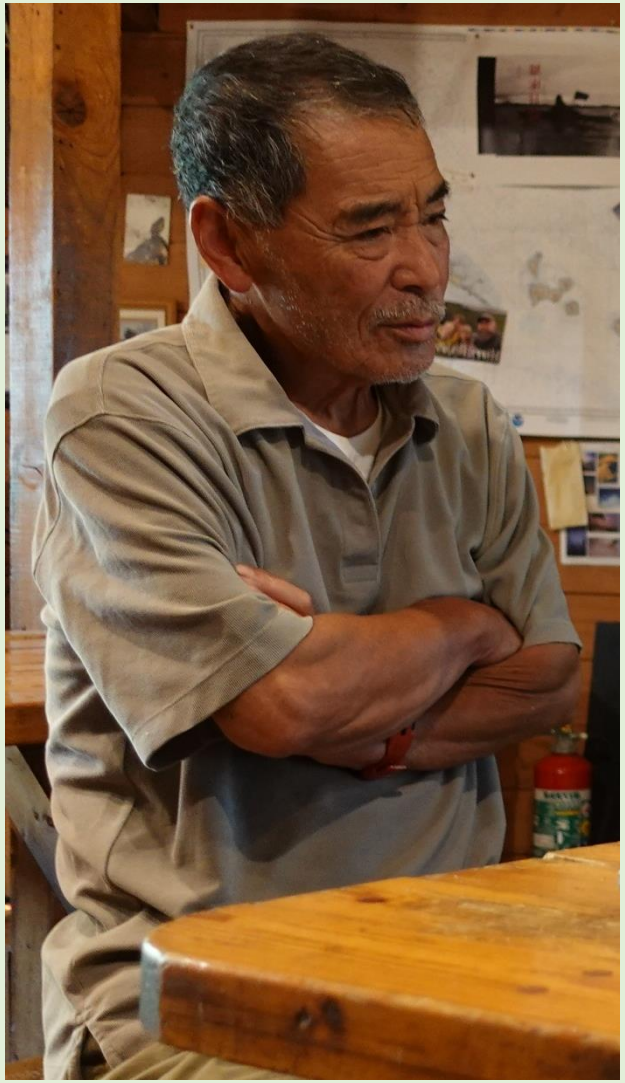
ートを開けて滑れるようにすれば、みんな満足するし事故も減る」と、新谷さんはあくまでスキーヤーに寄り添って考えていた。こうして出来上がったのが、ニセコルールだ。

● ニセコルールへの批判

しかし、ニセコルールが成立した後も、批判の声が多かった。どの都道府県でもコース外活動を禁止しており前例がなかったからだ。また新谷さんは、強い風の影響で雪崩が起きるという考えの元でゲートの開閉を判断していた（コラム：新谷仮説）。そんな中、雪崩の研究をしていたある学者が「**風は雪崩の絶対条件にはならず、十分条件にしかならない**」という旨が書かれた論文を発表したことにより、対立構造が出来てしまった。「雪崩学者の格好の餌食になって、袋叩きにあった。匿名のメールで怪文書が送られてきたりもした」と新谷さんは当時の様子を語る。「**でも『雪崩』と『雪崩事故』は違う。**『雪崩事故』を何とかするため、死者を減らすためにニセコルールが出来た」と新谷さんは話す。実際に雪崩事故の数が減って、世間的にも成果が認められてからは、こうした批判もなくなったという。

ただし、知名度が上がったことによって新たな批判が生まれた。ニセコルールによって新雪滑走で利益を上げていると考えられたからだ。「勘違いされやすいけど、観光振興のためにルールを作ったわけじゃない。**命を守るために作った**」と新谷さんは強く語る。

また、近年は新しい問題も出てきている。「ニセコルールは成果が出ているからこそ、ニセコのスキー場は完璧に管理されていると勘違いする人が出てきている」と新谷さんは苦言を呈する。新谷さんによると、ニセコの安全性をうたってビジネスを展開するツアーガイドも存在するそうだ。「ゲートが空いている時は、コース外を滑っても絶対に事故にあわないと考える人がいる。でも**雪山に絶対はない**」と改めてコース外滑走の危険性を語った。



雪崩事故について話す新谷さん

「安全に雪を楽しめる環境を
続けることが大切」

● ニセコなだれ情報

新谷さんはニセコルールが出来たころから現在に至るまで、冬季は毎朝『ニセコなだれ情報』を発信している。「毎朝 4 時に起きて、実際に自分の目で雪の状態を見て、英語翻訳含めて 8 時までに情報を出すようにしている」と雪崩情報を出すまでの流れについて語った。また、実際に山をパトロールして状態を見る他、山の各地に設置した風向風速計や海上保安庁が公開している日本海の海上風速データから得た、気圧配置や風速の数値も利用している。「人の命がかかわっている以上、経験則だけでなく科学的な裏付けも大切にしている」と新谷さんは念を押した。

ニセコなだれ情報は、スキー客や関係者以外にも誰でも見ることが出来る。「**読むことによって自分の頭で考えることが事故防止の役に立つ**。与えられた情報だけで判断するのではなく、最終的に判断するのは自分だということを忘れないでほしい」と想いを語った。

● 今後の課題

今も自身の手で雪崩の観測を行っている新谷さんだが、現在ある重大な問題を抱えている。後継者の存在だ。「すでに（雪崩について）知識がある人ではなく、若い人に何とかしてほしい」と考える新谷さんは、今年の冬から新しい取組みを考えているという。「ニセコ高校の生徒さんを土日に山に連れて行って、ゲートで何をやっているかを体験してもらう。事故は人間のかかわりによって起こるものだから、一番人間のかかわり方を勉強できるゲートの仕事を見て、少しずつ学んでいってほしい」と新谷さんは語った。

コラム：新谷仮説

雪の中にある弱い層が割れて、上に積もった雪が滑り落ちることで雪崩になる。これは弱層理論と呼ばれ、雪崩発生のメカニズムを説明する通説として知られている。しかし「どのように弱層が割れるか」までは明らかになっていなかった。

新谷さんは多くの雪崩事故を見ていく中で「**強い風によって吹き溜まりに積もった雪が、滑走の刺激によって崩れて雪崩が起きる**」というひとつの答えを導きだした。現在この理論は「**新谷仮説**」と呼ばれ、実際にニセコの雪崩事故防止に役立てられているほか、この理論を科学的に証明するべく今まさに研究が進められている。

● ニセコが抱える問題

ニセコの町が抱える問題についても新谷さんに語っていただいた。

ニセコは近年、育児支援など様々な支援制度を整備し、多くの移住者が集まる町となっている。しかし、新谷さんはこの「移住者」という呼び方についてあまり良く思っていないという。「俺がここに来た頃、移住者は旅の者と呼ばれていた。今は逆に特別扱いされることが多い。どちらにせよ、元から住んでいる人は外から来た人に対して排他的になりがちで、移住者は移住者同士で閉鎖的なグループを作りがち」と移住をめぐる実情を語る。「移住すること自体はすごくいいことだと思うけど、**もともと住んでいる人に対する接し方は難しい**。今まで自分がどこで何をしていたかは関係ないし、あんまり言わない方がいいかもしれない。結局最後は人間性が問われる」と注意を呼び掛けた。

最後に「**大勢が安全に雪を楽しめる環境を続けることが大切。それを誤解されないで、やることをやっている町であってほしい。**」と熱く語った。

作成：菅原博史
（北海道大学　水産科学院　修士２年）